



### 新しい旅立ち

新しい年が始まった。新年は節目の時、大小は別として、将来に向かって志を立ててスタートする旅立ちの時である。

この巡礼記も昨年四月にスタートしたが、新年とともに少しでも充実させたいと思いい、年末に「追加取材」の口実で南スペイン、ポ

ルトガルを旅した。昨春の巡礼と前後するが、新年の第一回分だけは年末の旅で感じることから始めたい。△海始まるロカ岬▽ユーラシア大陸の最西端、ポルトガルの口

ポルトガルの大航海時代を賛えるリスボンの「発見モニユメント」の中にサビエルがいた(中央)



カ岬、首都リスボンから車で四十分余りのところにあり、岬に着いたのは、ちょうど夕陽が北大西洋に沈む時だった。

ロカ岬は、ポルトガルの憂国

リスボン港は当時、世界の玄関口。インドを発見したバスコ・ダ・ガマが四十四年前の

一四九七年に出港した港でもある。

ロカ岬の沖から赤道を渡り、南大西洋へ。喜望峰をまわってインド洋上の赤道を渡ってインドのゴアに着いたのは出港から一年一カ月後。風向きが悪く、通常の倍近くの日数がかかった。ヨーロッパまで十二時間の空の旅でくたびれたというのとは比較にならない。冷蔵庫もない時代に赤道直下を二度も横切り、肉も野菜も腐り、食べるものは虫のついたビスケットだけという記録が残っている。ポルトガル国王の依頼で教皇の代理大使としての東洋への旅。艦長は召使いの特別室へと何度も勧めるが、サビエルはそれを断って船倉で寝起きし、病人の看護や貧しい人たちのために祈ったと言われる。

ポルトガルは当時、世界最大の国で、東洋の宝を求め、大航海の時代を迎えていた。その中心にいたのが、ポルトガルの英雄、航海士、探検家、宣教師、そして、大航海時代の先駆者、サビエルである。

リスボン港は当時、世界の玄関口。インドを発見したバスコ・ダ・ガマが四十四年前の

一四九七年に出港した港でもある。

ロカ岬の沖から赤道を渡り、南大西洋へ。喜望峰をまわってインド洋上の赤道を渡ってインドのゴアに着いたのは出港から一年一カ月後。風向きが悪く、通常の倍近くの日数がかかった。ヨーロッパまで十二時間の空の旅でくたびれたというのとは比較にならない。冷蔵庫もない時代に赤道直下を二度も横切り、肉も野菜も腐り、食べるものは虫のついたビスケットだけという記録が残っている。ポルトガル国王の依頼で教皇の代理大使としての東洋への旅。艦長は召使いの特別室へと何度も勧めるが、サビエルはそれを断って船倉で寝起きし、病人の看護や貧しい人たちのために祈ったと言われる。

立身出世を夢見た時もあつた。が、志を立て、神にすべてを委ねる中で成長していった一人の人間である。もちろんサビエルのような大事業はだれにでもできるものではない。しかし、どんなに小さなことであれ、志を持ち、前向きに生きる努力をする。そして、他者に施しができなくとも、笑顔で他者を自分と同じように大切にすることはできる。サビエルを特別な人として神棚に飾るのではなく、サビエルとともに旅立つ意欲を失わないことこそが大切だ。

地果て、海始まるロカ岬から、新たな旅に出発したいと思つたのである。(元山口放送取締役ラジオ局長)

詩人カモンエスの詩「地ここに果て、海始まる」と書いた大きな十字架の石碑が立っている。カモンエスは、昨年八月にマカオを旅した時、その名前をつけた公園があつた。

ポルトガルは大航海時代に交易によって大きな富を得たが、それが汚職など政治の腐敗を招いた。それを詩を通して糾弾したのがカモンエスである。国民的な人気者で、彼の正義感を「ポルトガル魂」と言うらしい。とにかくロカ岬は地終わり、海始まるところである。

夕陽を眺めながら、サビエルのことを思い浮かべた。サビエルも大西洋に沈む夕陽を何回も見たに違いない。

ポルトガル大陸の最西端、ポルトガルの口

ユーラシア大陸の最西端、ロカ岬の夕陽

